

華山と洞天一大上方を中心として

大形徹

はじめに

2010年の8月31日～9月1日の二日間、土屋昌明・鈴木健郎・大形徹・樊光春（陝西省社会科学院）・張方（陝西省社会科学院）の五名で華山、大上方と北峯の調査をした。

華山は、司馬承禎『天地宮府図^{*1}』三十六小洞天^{*2}の「第四西嶽華山洞」に相当する。そこでは、「惣仙洞天」と呼ばれている^{*3}。ほかに清、李榕纂輯『華嶽志^{*4}』などの文献資料があり、ここでは調査で撮影した写真、蒐集した資料に文献の図をあわせて考察する。なお華山の洞としては、「嶽に四洞有り、西に西元と曰い、南に正陽と曰い、東に正陽と曰い、北に水簾と曰う^{*5}」とされているが、今回はそれらを全く調査していない。中でも水簾洞は、「深さ三百里、中に瑤臺玉玉室有り、樹は則ち蘇茅芳林、泉は則ち石髓金精…^{*6}」とされており、規模広大なものである。そのため、小論は「華山と洞天」と題したものの、そのごく一部の調査にとどまることをあらかじめ、お断りしておかねばならない。なお、大上方と北峯の調査のうち、大上方は写真を多くし、やや詳しくし、北峯は簡略にした。北峯はロープウェイで上がることができるが、大上方は一般の観光ルートには組み込まれていない。大上方へ至る登山道は急峻で、そこを訪れた日本人も、おそらく、これまでごくわずかであり、紹介する価値があると思われるからである。

8月31日 華山 大上峯眞武觀をめざす。徒歩

9月1日 華山北峯へ。索道（ロープウェイ）

華山は、西安の東、華陰県に聳える山で、標高は1997メートル^{*7}である。『爾雅』釋山には、まず、

河南、華（華陰山）。河西、嶽（吳嶽）。河東、岱（岱宗、泰山）。河北、恆（北嶽、恆山）。江南、衡（衡山、南嶽）^{*8}。

とみえる。

これは、「河」を中心にして、南、西、東、北と分けた上に、「江」の南をつけくわえている。山を説く際に、「河」や「江」を基準にするというのが興味ぶかい。ここでは中央は設定されていない。また、ここでは「華（華陰山）」は「河南」つまり、黄河の南とされている。

注1…『雲笈七籤』卷之二十七、洞天福地、天地宮府圖并序、三十六小洞天。

注2…拙稿「洞天における山と洞穴—委羽山を例として」16頁に「三十六小洞天」として表にまとめている。『洞天福地研究』第1号、2011年、所収。

注3…これらの文献については、「二、華山洞」において考察する。

注4…『華嶽志』八卷（参考文献に詳しく記した）。※仙姑觀は今回調査した道觀。

注5…『華嶽志』卷一、水簾洞に、「嶽有四洞、西曰西元、南曰正陽、東曰正陽、北曰水簾」。

注6…『華嶽志』卷一、水簾洞に「深三百里、中有瑤臺玉玉室、樹則蘇茅芳林、泉則石髓金精…」。

注7…『中華人民共和國地圖集』、地圖出版社、1979、地形図には、華山は1997mと記されている。『道教辞典』、平河出版社、華山（奈良行博執筆）は、2154メートル。

注8…（ ）内は西晋、郭璞（276～324）の注。

注 9…泰山爲東嶽、華山爲西嶽、霍山爲南嶽（即天柱山。潛水所出）、恆山

注 10…漢班固纂集、明郎壁金訂定、日本鶴信之訓點、『白虎通德論』巡狩
http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/data/B60_1128/0073_1.html

注 11…揜は原文は桶。前注『白虎通德論』には赤字で揜と書き込まれていた。揜では文意が通じないため、ここでは置き換えた。

注 12…岳者何謂也。岳之爲言桶、桶功德。東方爲岱宗者、言萬物更相代於東方也。南方爲霍山者、霍之爲言護也、言萬物護也、太陽用事、護養萬物也。西方爲華山者、華之爲言穫也、言萬物成熟、可得穫也。北方爲恆山、恆者、常也、萬物伏藏於北方、有常也。中央爲嵩山、言其後大之也。

注 13…『四部叢刊初編』所収の『尚書大傳』にはこの文はみえない。

注 14…丁肇琴「華山民間傳說初探」を参照。
http://www.gec.ttu.edu.tw/image/doc/TTUGEC_Journal/6th_03.pdf

注 15…華陰縣有華山、遠而望之若華狀。

注 16…荊勤学編著『華山磨崖題刻』中国文化出版社、2009。

しかし、同じく『爾雅』釋山の後半部分に、

泰山は東嶽爲り、華山は西嶽爲り、霍山は南嶽爲り（即ち天柱山。潛水の出づる所）、恆山は北嶽爲り（常山）、嵩高は中嶽爲り（大室山なり）*⁹。

とみえる。

ここで、東西南北と中央の五嶽があらわれる。なお『白虎通*¹⁰』巡狩には、

岳とは何の謂ぞや。岳の言爲るや揜*¹¹、功德を揜するなり。東方を岱宗と爲すは、萬物更もごも東方に相い代わるを言うなり。南方を霍山と爲すは、霍の言爲るや護なり、萬物護るを言うなり、太陽、事を用い、萬物を護り養えばなり。西方を華山と爲すは、華の言爲るや穫なり、萬物成熟し、穫を得可きを言うなり。北方を恆山と爲す、恆は常なり、萬物、北方に伏藏し、常有ればなり。中央を嵩山と爲す、其の後ち之れを大べばなりなり*¹²。

とある。

ここでは、「華之爲言穫也、言萬物成熟、可得穫也」と、「華」と「穫」の音通で説明されている。これは以下の『山海經』にいう「華（＝花）」のようにみえるからという説明とは異なっている。

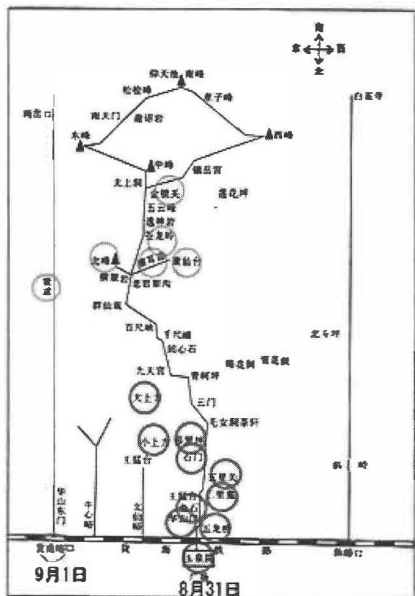
なお『白虎通』には、『尚書大傳*¹³』を引用し、「五嶽謂岱山、霍山、華山、恆山、嵩山也」と、「五嶽」というまとまりで華山のことが述べられている。

『禹貢錐指*¹⁴』所引の『水經注』所引の『山海經』には「華陰縣に華山有り、遠くにして之れを望まば華の狀の若し*¹⁵」とみえる。華山には西峯・南峯・東峯・北峯などがある。それらがあわさって華のようにみえるのであろう。しかし、山は岩の塊という感じである。「華」には二声と四声の声調があるが、華山の場合は四声で発音し、地元の人たちは、みなそのように呼んでいた。しかし、北京など離れたところでは、むしろ二声で発音しないと通じない。

8月31日に我々がめざしたのは、北峯の下にある「大上方」真武觀である。このルートは、荊勤学編著『華山磨崖題刻*¹⁶』の華山游覽示意图には、「大上方」という地名のみ示され、そこに至る道筋は示されておらず、華山景区門票の裏面の華山游覽示意图では、「大上方」という地名すら記されていない。通常の登山ルートとは異なっているということであろう。

「大上方」真武觀には八十歳を越えた女性道長の曹祥貞*¹⁷氏がいる。我々五名に同行した女性二名*¹⁸は、いずれも真武觀の曹氏のもとで修養するために登山したとのことである。真武觀には最短距離で登るルートがある。登山道はかなり険しく、ほとんど階段ばかりだが、その階段が時には垂直に登る梯子

『華山磨崖題刻』華山游覽示意图



華山游覽示意图



華山游覽示意图（華山景区門票の裏面）をもとに改変

注 17…「道教之音」
<http://www.daoisms.org/article/sort010/info-2420.html>(2012.5.4 検索)
 に全真伝戒監戒大師曹祥貞道長として写真とともに紹介される。1923 年 6 月生まれ、という。我々がお会いしたときは 83 歳ということになる。

注 18…沈さん=実業家、孔さん=孔子の子孫と自称。

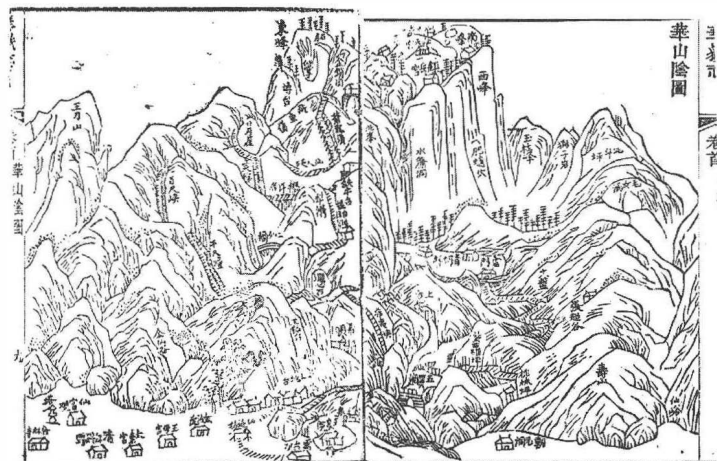
のようになっていた。道の脇には安全のための鎖が取り付けられており、我々は、それを伝って攀じ登った。鎖がまだなかったときは、岩に穿たれた指をかけるための浅いくぼみだけが頼りであったという。以下、そこにいたまでの時間を記し、あわせて『華嶽志』の図、および説明、それに筆者の撮影した写真を配した。

一、登山ルートの詳細と実際に見た洞の状況

○8 月 31 日 華山 大上方真武観をめざす。徒歩。

『華嶽志』には、華山陽図と陰図があり、華山の全体像が把握できる。ここでは調査した地点と重なる華山陰図を紹介する。

八月三十一日は大上方真武観をめざした。そこに住む坤道（女道士）の曹祥



[1] 華山陰図「大上方」は「上方」として右図の真ん中あたりにみえる。水簾洞はさらにその上にある。

[2] 純陽観 8:48

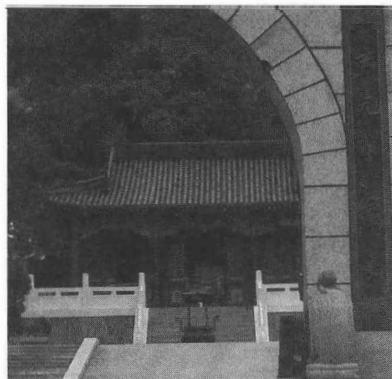
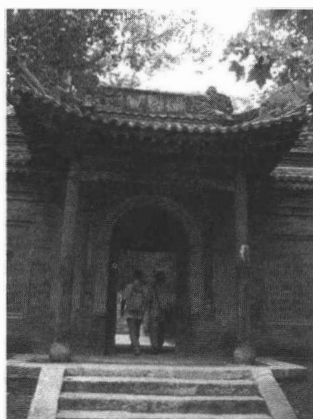
純陽観の扁額がみえる。



[3] 『華嶽志』題字

[4] 仙姑観 8:53

道観に掲げられた「仙姑観
簡介」によれば、唐、玄宗
の妹の金仙公主が景雲元年
(710) に華山で修養した
際に建てたとされる。

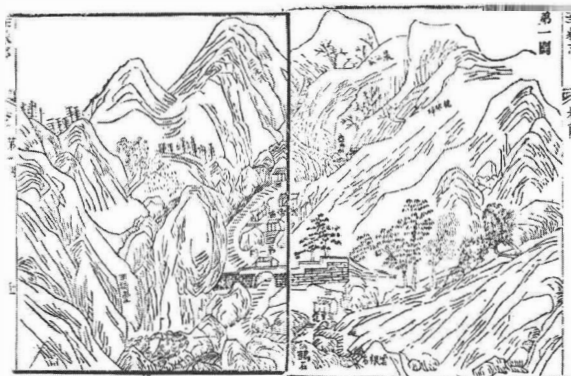


[5] 玉泉院 玉井の水が病
を治したというところから
玉泉院がつくられたとい
う。

[6] 玉泉院 9:25

[7] 五龍潭 雨を祷れば輒ち應ず。上に五龍宮有り*19。
手前に写っているのは挑山夫。

注19…『華嶽志』卷一所引、都穆記に「祷雨輒應。上有五龍宮」。



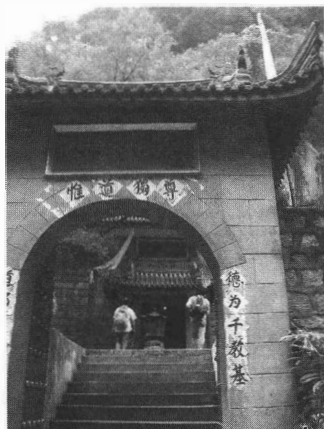
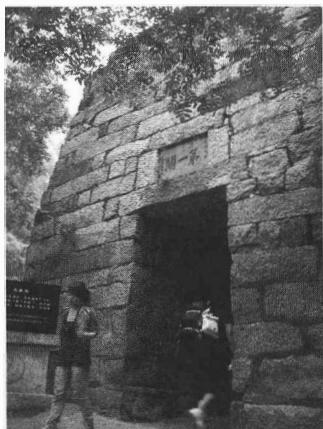
[8] 五里関 10:18

第一関一名五里関*20 上方に三元洞がある。

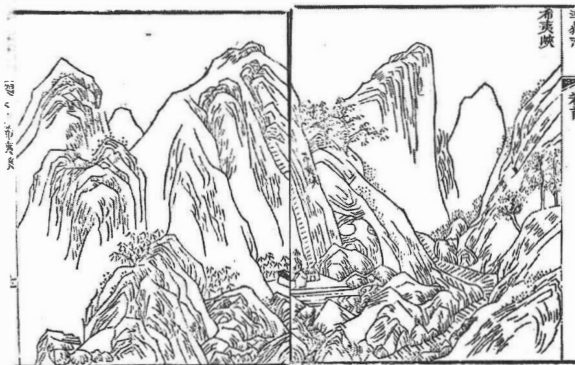
注20 『華嶽志』卷一〔第一関〕所引、王宏撰『華山記』注。

[9] 第一関の題額（左）
下の案内板には五里関とある。

[10] 青雲洞天 10:31（右）
奥に青雲洞がある。かなり大きいが、『華嶽志』にはみえない。



[11] 希夷峽 『華嶽志』
の玉泉院の図に希夷洞がみえる。希夷先生は宋の陳搏。



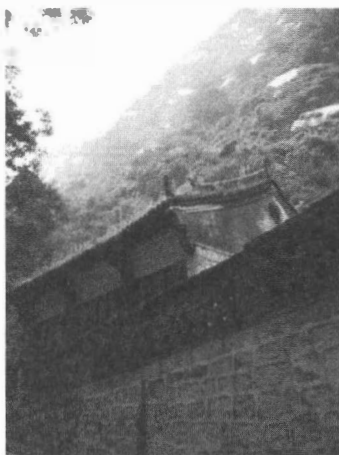
[12] 莎蘿坪 図の左に大
上方・小上方がみえる。



[13] 莎蘿坪あたりの建物
と景色（写真左） 10:48
『華嶽志』には莎蘿庵があっ
たことを記す。

莎蘿坪の説明書き（写真右）
10:47

陳搏が沙羅樹を植えたと言
われるが、その説明は『華
嶽志』にはない。このあた
りは少し盆地になっていて
平らである。



[14] 莎蘿園（写真中・右）
11:05

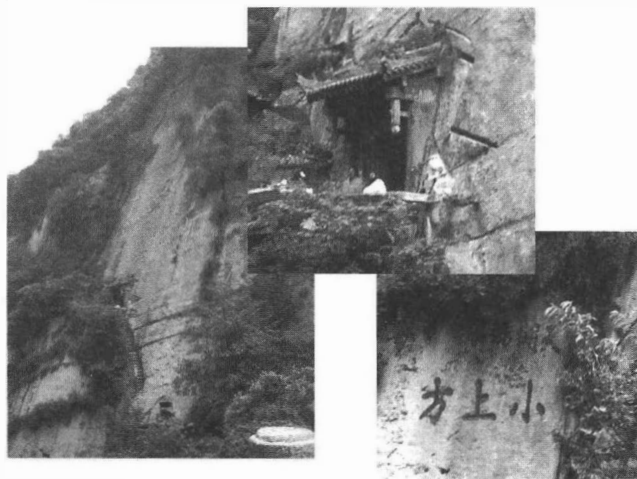
休憩できるようになってい
る。石碑の脇から小上方・
大上方に登ってゆく。『華
嶽志』には「洞天坪（図左）」
のことを記すが、場所は特
定できなかった。



[15] 小上方 11:06

小上方は崖に附するの樓
閣、其の徑を蹴起するも亦
た險し*21。写真中には道
士の姿が見える。表紙写真
も参考のこと。

注 21…小上方附崖 樓閣、
蹴起其徑亦險。





[16] 大上方をめざす最初の階段 11:09

小上方には立ち寄らず、大上方をめざした。最初の階段は、ほぼ垂直で濡れており、すべりやすい。鎖がなければとても登れない。石に開いている穴は、かつて鎖のなかったころ、手がかりにするためのものだという。

[17] 濡れた階段をあがったばかりのところの住居 11:13

右側は洞になっていて中には神が鎮座している（写真右2点）。奥にも小さな祠がある。写真左は祠を大きく写したもの。

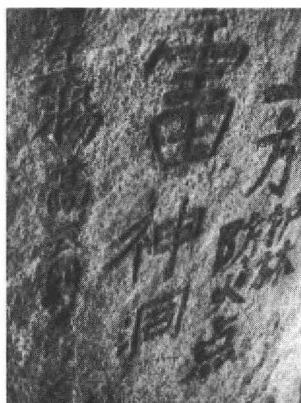




〔18〕登山道（写真左）11:13 階段ができる前の古い登山道。道というよりもロック・クライミングである。（写真中）11:50 岩を掘り込んで作った階段、階段の左側に古い登山道の痕跡が残っている。（写真右上、右下）12:39 雷神洞上部。鉄の梯子（右下）があり、上部（右上）にぬけるようになっている。

〔19〕雷神洞 12:39

『華嶽志』には雷神洞の名が見えるが、異なる場所である。（写真右）のような神像が飾られていた。雷神であろう。



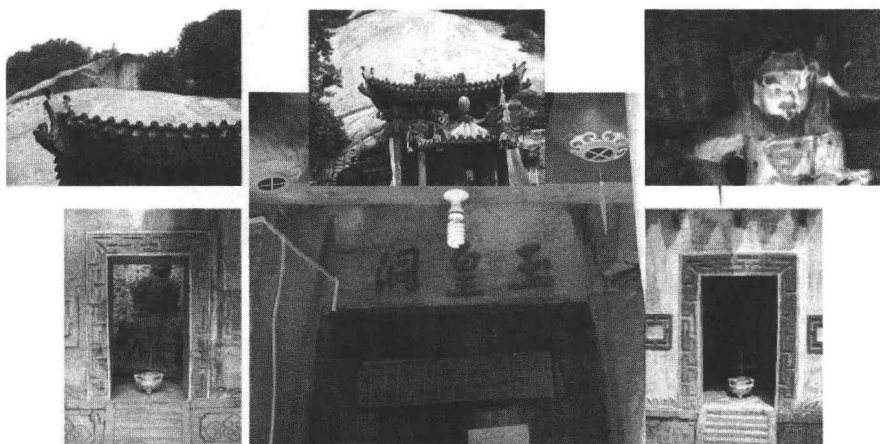
〔20〕大上方真武観 13:06

大上方の真武観（写真左）は檜を組んでその上に建てられている。真武観には八十歳を越した女道士の曹氏が住む。この日、同行した女性二人は宿泊して女道士のもとで修養するという。写真下は門の題額。『華嶽志』巻一〔第一關〕に「大上方、小上方（楊

嗣昌記）。沙蘿坪の東、小上方に對し、又た上、大上方と爲す（王輔志）、西元門の下に在りて、山形、椅の如し、南は虚を凌ぎ、北は雲のごとき巖、中汚居る可し。又た瀑布有り、長さ数百丈*22」とみえる。（図左下）は「12 沙蘿坪」を拡大。大上方、小上方は隣に描かれるが、歩いて2時間ほどの距離。

注 22…大上方小上方（楊嗣昌記）沙蘿坪東對小上方、又上爲大上方（王輔志）、在西元門下、山形如椅、南凌虚、北雲巖、中汚可居、又有瀑布、長数百丈。※中汚は地名。卷一にみえる。





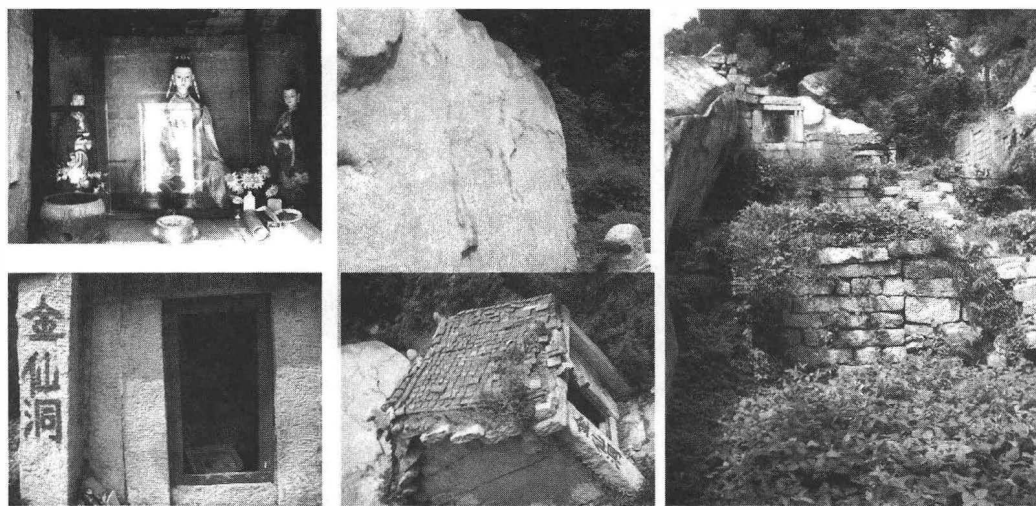
〔21〕 通明洞天（写真左上、写真中上）13:25 玉皇洞（写真中下）13:26

いずれも『華嶽志』には記載がない。神像が飾られている。



〔22〕 放置されている釣り鐘（明）と瓦 13: 29

風調雲順 李蘭□ 王布宰□ 鮮君宣□ 趙門氏□
万曆二十九年二月吉日造。
万曆二十九年は 1601 年にあたる。木にぶらさげられていた。瓦は葺き替えたあとのものであろう。



〔23〕 金仙洞 13:34・14:30『華嶽志』巻二に「西元門（王履記）上方鑠盡くるの處、石隙有り西元門と號す。乃ち金仙公主昇仙の門、則ち元宗の金仙を覓めて鑿ちし者なり *23」とみえる。「4 仙姑観」は玄宗の妹の金仙公主が修養したところとされる。「元宗」は「玄宗」。清、康熙帝の諱を避けてのもの。右の写真に門らしきものが見える。金仙洞はその奥にある。中には金仙公主の像がある。ここが西元門ではないか。登り 13:34 に上からの写真を撮り、帰り 14:30 に調査を行った。金仙洞の裏の大きな岩には長文の碑文が記される。

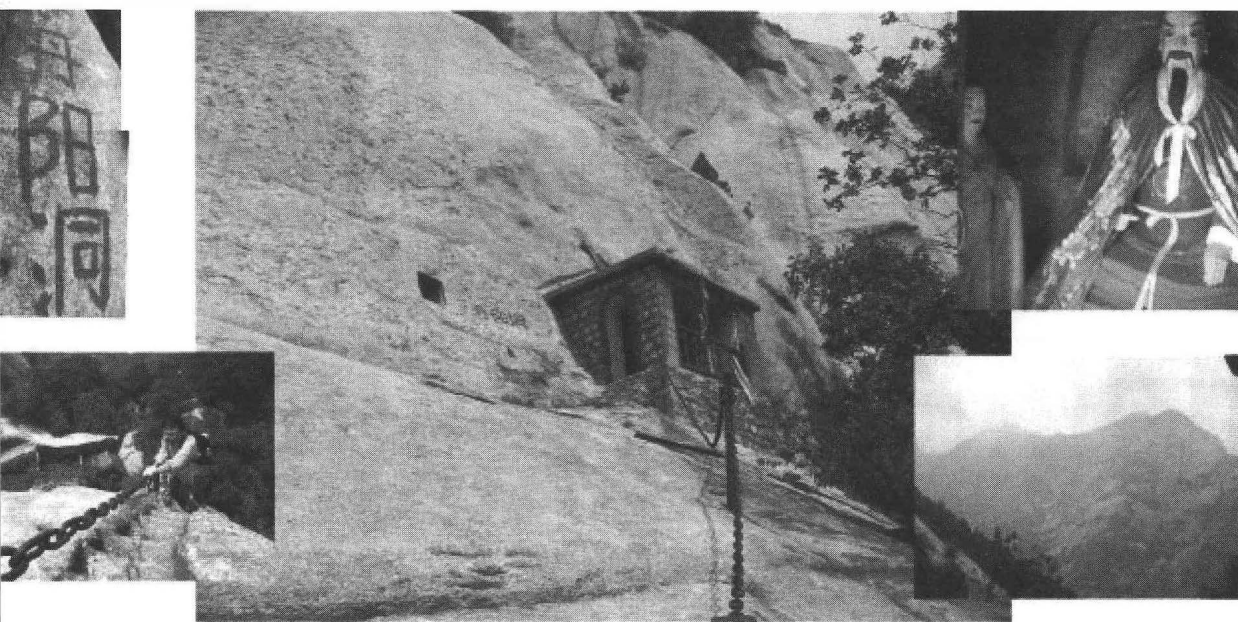
注 23…『華嶽志』巻一、西元門（王履記）上方鑠盡處、有石隙、號西元門、乃金仙公主昇仙門、則元宗覓金仙而鑿者也。



[24] 八仙洞 13:43

『華嶽志』巻一に「八仙洞（都穆記） 杪蘿坪の西洞に在り、崖の石壁に面し、立つこと尺許り、即ち鑿ちて坎と爲し、險しくして上る可からず*24」とみえる。石壁には龕のようになった坎(写真下中 2 点)がある。香炉が置かれているので、その中には像があったと思われるが、いまは何もない。八仙洞と朱書きされた入り口の中に写真上のような八仙（藍采和・曹国舅・韓湘子・呂洞賓・漢鍾離・李鉄拐・張果老・何仙姑）の像が飾られている。

注 24…八仙洞（都穆記）在杪蘿坪西洞、面崖石壁、立尺許、即鑿爲坎、險不可上。



[26] 丹陽洞（丹陽祖師洞）

13:59

『華嶽志』には見えない。

貞氏をたずねるためである。ふもとにある純陽観を出て、仙姑観に立ち寄り、聞き取りを行う。仙姑観は唐、玄宗の妹の金仙公主と関わりのある道観である。そのあとは登山道に入り、ゆるい坂道を登っていく。「莎蘿坪」に出た。「坪」は山や丘陵の平らな部分に使用される語である。ここの平地もかなりの広がりをもつ。華山には「十八盤坪」等、「坪」とされる場所がいくつかある。ここから写真を紹介しよう。「莎蘿坪」の奥に登山道がある。左にみえる断崖の壁面に「小上方」がみえた。岩肌にへばりつくような狭い石段の上に道観らしき建物の一部がみえる。『華嶽志』でも、そこに到る道の陰しさをいう。その奥は洞になっているのだろう。道士が二人、景色を眺めていた。「上方」は文字通り、上の方角をさす場合と、上の方角にある「天界」の場合とがある。後者の場合は「下方」という言葉とともに使われていることが多い。「小上方」「大上方」とともに地上の天界をイメージしているように思われる。

我々は、小上方には立ち寄らず、大上方に向かった。最短ルートとのことであるが、ほとんど垂直に登るような石を掘り込んだ階段から登り始めた。この先も急峻な岩肌を舐めるように登っていくことになる。上りは眼前に階段しかないため、恐怖は感じない。むしろ、下りの方が、足許から急坂がそのまま山の下の方まで伸びていき、引き込まれるような感覚に襲われる。だが、不思議なもので、しだいに慣れてきて、それが、あたりまえになってくる。そのことがむしろこわい。

1 時間半ほど登り、途中、洞がみえる。雷神洞と朱書きされている。そこには羽が生え青色に塗られた雷神とおぼしき像が飾られている。その洞を鉄の梯子で上へと垂直にぬけるようになっている。あたかも雷神が天から降下して、その洞に棲みついたようなイメージを与える。地の窟から這い出るようにして上に出たあと、30 分程、さらに登り、大上方の真武観に到着した。午後 1 時過ぎである。真武観は道観と呼ぶには、あまりに小さい。民家のようなイメージである。ここに曹氏という女道士が隠棲している。女性の道士は、これまで各地の道観で見かけた。また道士ではなくとも道観で仕事をしている女性が多い。華山のふもとの仙姑観を案内してくださったのも女性である。

真武観の曹氏は、このとき 83 歳である。つきそいの人とともに建物の奥から、あらわれ、われわれの横にそっと腰掛けた。ほとんど話をせず、穏やかな笑みを浮かべて、じっと坐っている。それだけで神々しい雰囲気が漂い、気圧されたのか、ふだん饒舌な土屋昌明氏が、まったく口を開こうとしない。前もって質問項目を数多く準備していたのだが、結局、何もたずねないまま、我々は供された昼食を黙々と食べた。曹氏と一緒に写真を撮るのも憚られたため、ここでは建物の写真のみを紹介する。

なぜ出家して道士になったのか云々の話は宗教の調査としては重要である。けれども、それは信仰の根幹に関わる部分であり、初対面の者が簡単に聞くこ

とができるようなものではない。なお曹氏の詳しい経歴と写真はインターネットで紹介されている。

真武観から横にそれた道を行くと通明洞天があり、玉皇洞がある。玉皇洞の前には放置されたように赤錆びた釣り鐘がぶらさがっていた。「風調雲順 李蘭□ 王布宰□ 解君宣□ 趙門氏□ 万曆二十九年二月吉日造…」とあり、明の万暦のものだとわかる。洞のなかには神像が置かれていた。

帰路、登りに写真を撮った金仙洞と名付けられた廟を調査した。廟の裏には巨大な岩の塊があり、そこには摩崖碑のように文章が刻されていた。

そのあと八仙洞をたずねた。ここには八仙の像がある。丹陽洞は洞の名が岩肌に朱書きされていた。丹陽祖師洞ともいう。ここにも神像があった。『華嶽志』に載せられていない洞も多くある。

大上方は一般的な観光ルートではない。そのため登山者もほとんどいない。下山時、暗くなりかけている時に西欧人の若者数名とすれ違った。危ないので登らない方がよい、と引き留めたが、そのまま登ってってしまった。

○9月1日 華山北峯へ。索道（ロープウェイ）

この日は北峯の調査をした。索道で一氣に登った。そのため、登山の苦労は、それほどでもなかったが、擦耳崖や天梯など難所はあった。前日とは打って変わって登山客が多く行き交っていた。観光地であり、これまで、写真の紹介も多い。そのため、ここでは洞天に関わるものを中心に、簡単に紹介する。

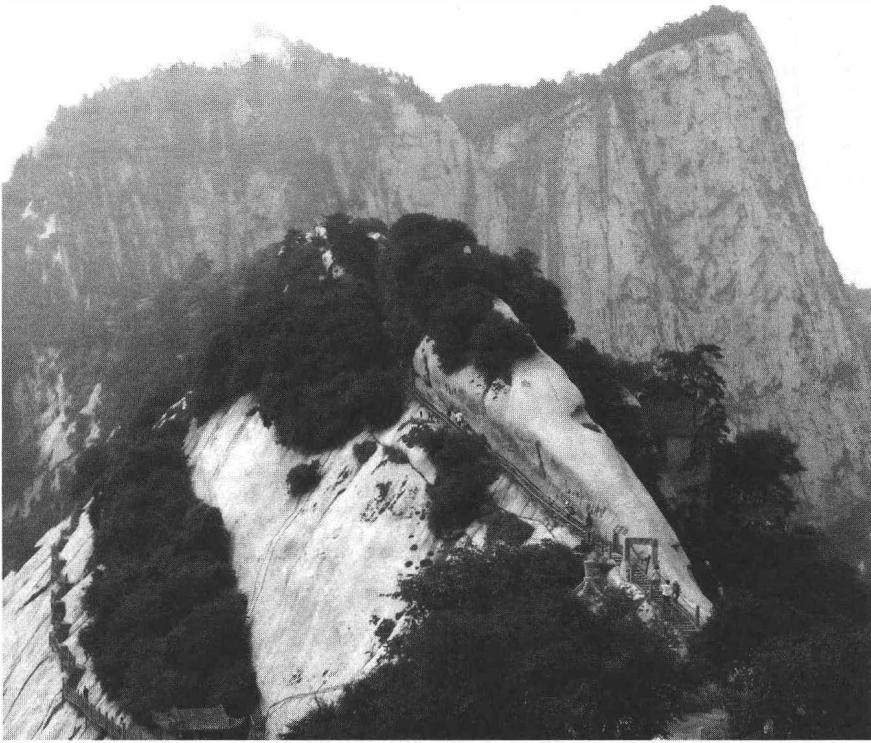
北峯の途中までは索道である。三時間近くかけて金鎖関まで登った。さらに先があったが、霧がかかってきたため、そこで引き返した。ここにも洞が多く



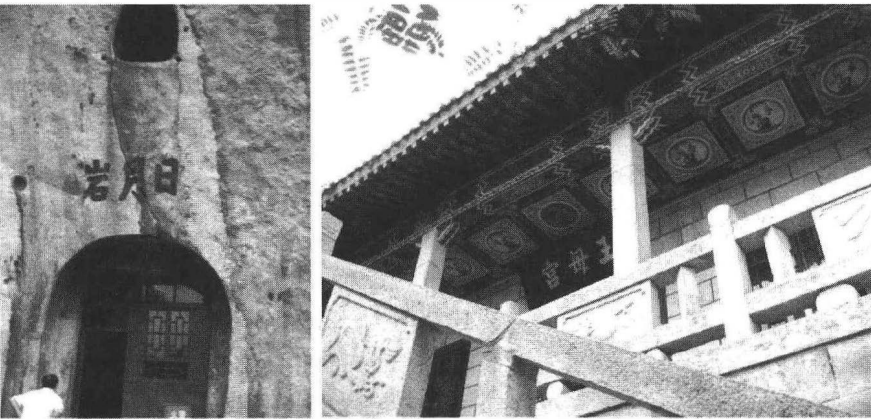
〔27〕 齊天洞 10:48

内部にベッドが置いてあった。聚仙台は、かなり大きい。

[28] 北峯（雲台峯
1614.9メートル）よりみ
た景色



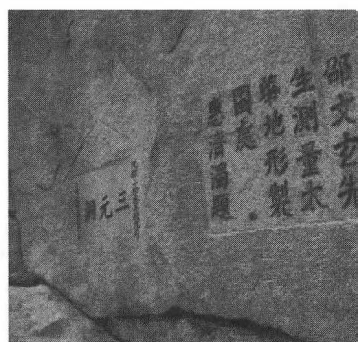
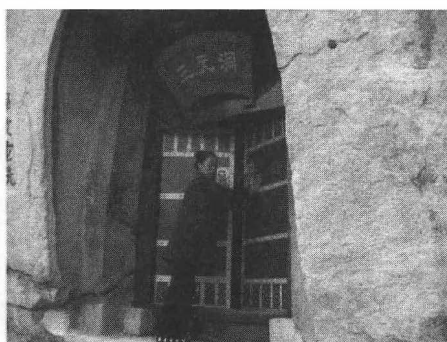
[29] 日月岩 11:32
洞とは記されないが、洞や
石室のようである。写真右
は王母宮



[30] 『華嶽志』巻一の三
元洞に「三元洞は日月崖よ
り西南に去ること半里許
り、三元洞有り、東向す
*25」とみえる。右は、切
り取り拡大図。

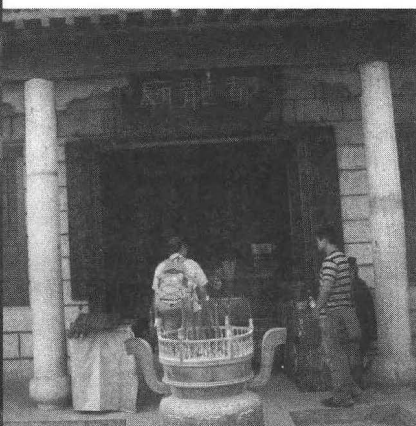
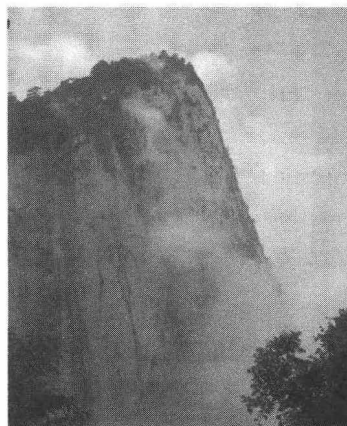
注 25 三元洞循日月崖西
南去半里許、有三元洞、東
向。





〔31〕 三元洞 11:39

写真左は内部の天井、模様がある。岩に隙間があり、明かりとりのようになっている。写真中は、わざわざ鍵をあけて中を案内してくれた女性。写真右は岩に三元洞と刻す。



〔32〕 都龍古廟（写真右）

12:00

北峯よりみた西峯（写真左） 12:31、金鎖関（写真中） 13:29 まで行き引き返した。

あった。大きく、また実際に使用されているものも多かったが、奥深く底がしれないといったものはなかった。人工的に掘削したようなものもあった。一部の洞は、現在も道士が住居として使用している。また土産物屋や事務室のようになっているものもあった。

二、華山洞

第四西嶽華山洞、周廻三百里、名づけて惣仙洞天と曰う、華州華陰縣に在り、真人恵車子之れを主る *26。

注 26…第四西嶽華山洞、周廻三百里、名曰惣仙洞天、在華州華陰縣、真人恵車子主之。

惣仙洞天と名づけられ、真人恵車子がつかさどっていたとされる。真人恵車

子については『洞玄靈寶真靈位業圖』地仙散位で「惠車子」としてあらわれ、注釈に「淳于典柄之師 *27」と記されている *28。

また、杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』三十六洞天に、

華山總真洞天三百里、西嶽に在り *29。

と、「總真洞天」とされている。

十大洞天には含まれてはいないものの、三十六小洞天（三十六洞天）の一つとされている。

毛女

現在、華山には毛女洞がある。ここでは洞に住んでいた例として毛女と、それに関わる伝承を調べた。毛女に関する記述のもっとも古いものは『列仙傳』巻下十四番目の話 *30 である。

毛女

毛女なる者は、字は玉姜、華陰山中に在り。獼師世世之れを見る。形體毛を生ず。自ら言う秦始皇の宮人なり。秦壞れ流亡し、山に入りて難を避く。道士谷春に遇う。教えて松葉を食らわしめ、遂に饑寒せず、身輕きこと飛ぶが如し。百七十餘年、止まる所の巖中、琴を鼓するの聲有りと云う *31。

華陰山中は華山をさすと思われる。ここで「所止巖中」とされる。岩屋の中ということであろうが、洞のようなものが想像される。「百七十餘年」とあるので、その中で暮らして、その年数以上の寿命を得たことになる。また、そこで琴を演奏していたことも説かれ、高雅に暮らしていたことがうかがえる。「洞天」という言葉はないものの、それにつながる最も古い文献上の記録の一つとみなしうる。

『列仙傳』では谷春という人物が毛女に松葉の服用を教えたという話になっている。谷春は『列仙傳』下に独立して伝に立てられている。つまり仙人であるが、そこでは道士谷春と呼ばれている。そのため、道士と仙人は一連のもの、つまり、道士が修行して仙人になることができると考えられていたことがわかる。

唐、項斯の「華陰の隠者を送るの詩 *32」に、

往往にして城市に到るは、藥錢を徴せんとするに非ざるを得。

注 27…『三洞群仙錄』卷之十一、顧和執轡淳于典柄に「眞誥、顧和吳人也。少孤有志操、仕晉爲中丞、遷尚書僕射、永和元年、尸解。太上迎補爲執蓋郎、今在華陽洞中。列仙傳、淳于上虞人也。自少好道、長於十筮、入天目山隱居、遇仙人惠車子、授丹經功成。今在洞中爲典柄郎、主試有道之士」とみえる。

注 28…『無上祕要』卷之八十三、「得地仙道人名品」にも同じ内容が記されている。

注 29…華山總真洞天三百里在西嶽。

注 30…『正統道藏』（藝文印書館、1977）第八冊、洞真部、記伝類。鑑賞・中国の古典 9『抱朴子・列仙伝』（小川環樹・本田濟監修、角川書店）pp.145～345、pp.410～430 頁（参考文献・索引）昭和 63 年 7 月（共著者、尾崎正治、平木康平、『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆）を参照。



『列仙全傳』毛女の挿図より

注 31…毛女者、字玉姜。在華陰山中。獼師世世見之。形體生毛。自言秦始皇宮人也。秦壞、流亡、入山避難。遇道士谷春。教食松葉遂不饑寒、身輕如飛。百七十餘年所止巖中、有鼓琴聲云。

注 32…『全唐詩』卷五五四、送華陰隱者 項斯 往往到城市、得非徵藥錢。世人空識面、弟子莫知年。自說能醫死、相期更學仙。近來移住處、毛女舊峰前。

注 33…華山中毛女字玉姜、自言秦宮人、避難入山、道士教食松葉、遂不飢寒、身生綠毛也。

注 34…地部四 華山 列仙傳 又曰、毛女者、在華陰山中、獼師世世見之、體生毛、自言秦始皇宮人也。又曰、山有三峯、謂蓮花、毛女、松檜也。

注 35…人事部十四 毛 又曰、毛女字玉名姜、在華陰山、世世見之、形體生毛、所止巖中、有鼓琴聲、自稱秦皇時宮人也。

注 36…樂部十七 琴下 列仙傳曰、華山毛女、獼即見、常居岩彈琴。

注 37…道部十二 服餌中 集仙錄 又曰、玉姜者毛女也。居華山、自言秦人、始學食松葉、不飢寒。止巖中、其行如飛。今號其處、為毛女峯。

世人空しく面を識り、弟子、年を知る莫し。
自ら説く能醫死して、相期す更に仙を學ばんと。
近來移住の處、毛女舊峰の前。

ここには、「毛女旧峰」とみえ、唐代にも毛女の言い伝えがあったことがわかる。

唐末五代頃の『仙苑編珠』巻中、「赤斧餌丹、毛女餐松」には、赤斧が鉱物薬の丹薬を飲んだこととあわせて、毛女が植物の松を餐したことが並べられている。このうち毛女の部分だけ取り上げる。

華山中、毛女字は玉姜、自ら言う秦宮の人、難を避け山に入り、道士教えて松葉を食らわしめ、遂に飢寒せず、身に緑毛を生ずるなり、と *³³。

北宋初めの『太平御覧』にも毛女の記録がある。

地部四、華山、列仙傳

又た曰わく、毛女なる者、華陰山中に在り、獼師世世之れを見る、體、毛を生ず、自ら言う、秦始皇の宮人なり、と。

又た曰わく、山に三峯有り、蓮花、毛女、松檜と謂うなり、と *³⁴。

人事部十四、毛

又た曰わく、毛女字は玉、名は姜、華陰山に在り、世世之れを見る、形體、毛を生ず、止まる所の巖中、琴を鼓するの聲有り、自ら稱す、秦皇の時の宮人なり、と *³⁵。

樂部十七、琴下

列仙傳に曰わく、華山の毛女、獼即ち見る、常に岩に居りて琴を彈ず、と *³⁶。

道部十二、服餌中、集仙錄

又た曰わく、玉姜なる者は毛女なり。華山に居し、自ら言う秦人、始め松葉を食らうを學び、飢寒せず。巖中に止どまり、其の行くこと飛ぶが如し。今、其の處に號し、毛女峯と爲す、と *³⁷。

『太平御覧』は多くの項目に分かれているが、毛女は「地部、華山」、「人部、毛」、「樂部、琴」、「道部、服餌」などに登場する。その伝説が、よく知られて

おり、それらの項目にあげられる事項が、それぞれ毛女の特徴とみなされていたことがわかる。

南宋の『三洞群仙錄』巻二十には「毛女食松、何娘採橘」とみえる。「何娘」は『續仙傳』の徐州の女である何阿六である。ともに女仙で植物薬を服用したということで並べられているのだろう。これも毛女の部分だけ取り上げる。

神仙傳に、毛女字は正美、華山に隠れ、形體毛を生ず、自ら言う秦の時の宮人、後ち流亡して山に入る。道士教えて松葉を食らわしめ、遂に飢寒せず、身輕きこと飛ぶが如し。陳搏常に與に華山に遊ぶ。樵人多く之れを見る。詩有りて贈りて曰わく、藥苗、筍に滿たざれば、又た更に危巔に上る。首を回らせて路を歸り去るに、相い將に人、翠煙ならんとす。其の二に曰く、曾て松枝を折りて寶櫛と爲す。又た栗葉を編みて羅襦に代う、時に秦宮の事を問うもの有り、笑いて仙花を撚りて太虚を望む^{*38}。

ここでは詩を作ったことになっている。

『華嶽志』巻一、毛女峯では以下のように記されている。

毛女峯は十八番西南（雍勝畧）に在り、秦の宮人、玉姜此に隠れ、栢葉を食らい、水を飲み體に緑毛を生ず、人常に之れを見る。毛女洞有り、今に至るまで洞中、時に琴を鼓するの聲を聞く（華嶽集）、下に白石寺有り（老学庵筆記を按ずるに、華山に僧寺無し、此れ或いは院の誤ならん、と*39）。

『列仙傳』では「洞」という語はあらわれず、「所止巖中」であった。ここでは「毛女洞」とされている。また『列仙傳』では松葉であったものが、ここでは栢葉（＝柏葉、コノテガシワ）である。『本草綱目』には、「柏（本經上品）」に「服松栢法」とみえ、『孫真人枕中記』の内容が引用されている。そこでは、「松」と「栢」が合わせて論じられている。「松葉」は『本草綱目』所引の『別錄』にみえ、そこでは「毛髮を生ず」、「飢えず年を延ばす」等と記されている。

『抱朴子』仙藥篇では、毛女とは記されず、また終南山での話とされている。そこでは、秦王子嬰の宮女とされ、成帝の世で二百数十歳であったという。人間界にもどったあと、

乃ち將に歸らんとし、穀を以て之に食らわしむるに、初め穀の臭^かを聞きて嘔吐するも、日を累ねて乃ち安んず。是の如きこと二年許り、身の毛乃ち脱落し、轉^{うた}た老いて死す。向に人の得る所と爲らざらしむれば、便ち仙人と成らん、と*40。

注 38…神仙傳、毛女字正美、隱華山。形體生毛、自言秦時宮人、後流亡入山、道士教食松葉、遂不飢寒、身輕如飛、陳搏常與遊華山、樵人多見之。有詩贈曰、藥苗不滿宮、又更上危巔、回首歸去路、相將人翠煙。其二曰、曾折松枝為寶櫛、又編栗葉代羅襦、有時問著秦宮事、笑撚仙花望太虛。

注 39…毛女峯 在十八番西南（雍勝畧）秦宮人玉姜隱此、食栢葉、飲水體生綠毛、人常見之、有毛女洞、至今洞中時間鼓琴聲（華嶽集）、下有白石寺（按老学庵案筆記、華山無僧寺、此或院之誤也）

注 40…引用の前の部分も含め原文を紹介する。又漢成帝時、獺者於終南山中、見一人、無衣服、身生黑毛、獺人見之、欲逐取之、而其人踰坑越谷、有如飛騰、不可逮及。於是乃密伺候其所在、久圍得之、定是婦人。問之、言我本是秦宮人也、聞關東賊至、秦王出降、宮室燒燔、驚走入山、饑無所食、垂餓死、有一老翁教我食松葉松實、當時苦澁、後稍使之、遂使不饑不渴、冬不寒、夏不熱。計此女定是秦王子嬰宮人、至成帝之世、二百許歲、乃將歸、以穀食之、初聞穀臭嘔吐、累日乃安。如是二年許、身毛乃脫落、轉老而死。向使不爲人所得、便成仙人矣。

注 41…古丈夫洞在毛女洞下（王處一志）。在北斗坪之北西、臥虎石北、有靈芝石、獅子岩（傳奇）。古丈夫者秦之驪山役夫、毛女秦宮女殉葬驪山者、并以計得脫入華山隱此。

注 42…古丈夫秦二世時驪山役夫、逃難華山。唐大和中、陶太白、尹子虛、同陟芙蓉峯者、于松下見一丈夫、古服儼雅、一女子鬢髻彩衣、問之丈夫曰、僕秦之役夫、彼秦宮之女子、合爲殉者、同置于此、不知經幾甲子也。二人遂求金丹大藥、丈夫曰、子本凡人、初餌柏子、後食松脂、歲久凌虛、毛髮紺綠、不知金丹大藥也。吾有萬年松脂、千年柏子、可分食之。二人拜謝、因巢居蓮花峯上雲臺觀、士往往遇之、話得道之由云。（華陰志）

と、松葉を食べなくなり、穀物を食べるようになって死んでしまったという後日談が記される。おそらく、その結論が不都合なため、『華嶽志』では、そのような話は紹介されていない。

『華嶽志』巻五の顔光敏の毛女峯には以下のように記されている。

人傳毛女峯 時間毛女琴（人傳う、毛女峯 時に聞く毛女の琴、と）
欲寫秦宮怨 空山多衆音（秦宮の怨を寫さんと欲するも 空山衆音多し）

『華嶽志』巻一、毛女峯には続けて「古丈夫洞」のことも記されている。

古丈夫洞は毛女洞の下に在り（王處一志）。北斗坪の北西、臥虎石の北に、靈芝石、獅子岩有る在り（傳奇）。古丈夫なる者は秦の驪山の役夫、毛女は秦宮の女、驪山に殉葬されし者、並びに計を以て脱して華山に入り此に隠るを得^{*41}。

ここでは「道士谷春」ではなく、「古丈夫」とされる。彼は秦始皇の陵墓である驪山を造る際に徴用されていた役夫だという。驪山の造営が終われば、内部の構造を知る者は殺される。そのため、逃げ出したのであろう。毛女もまた秦の宮女であったため、驪山に殉葬されるところであった。ともに計略をもって脱出し、華山に逃げ込んだ、という話になっている。どちらも秦が滅びたという歴史をふまえ、史実にもとづいたかのような書きぶりである。

『華嶽志』巻二は華山に関わる人物の伝記を集めたものである。そこにも毛女と古丈夫のことが記されている。

〔仙眞〕〔秦〕

古丈夫は秦の二世の時の驪山の役夫、難を華山に逃がる。唐の大中の初め、陶太白、尹子虚、同に芙蓉峯に陟る者、松下に于て一丈夫を見る、古服儼雅、一女子鬢髻彩衣、之れを丈夫に問う、曰わく、「僕は秦の役夫、彼は秦宮の女子、合に殉と爲るべき者、同に此に匿れ、幾甲子を経るやを知らざるなり」と。二人遂に金丹大藥を求む。丈夫曰わく、「子は本より凡人、初め柏子を餌し、後ち松脂を食らわば、歳久しくして虚を凌ぎ、毛髮紺緑ならん、金丹大藥を知らざるなり。吾れに萬年松脂、千年柏子有り、分かちて之れを食らう可し」と。二人拜謝し、因りて蓮花峯上雲臺觀に巢居す、士往往にして之れに遇い、道の由を話得す、と云う。（華陰志）^{*42}。

ここでは、古丈夫と毛女は唐の大中（847～860）年間初頭まで存命して

いたことになっている。また陶太白、尹子虚という者たちの名がみえる。彼らは金丹の大薬を求めたが、古丈夫は万年の松脂、千年の柏子を与えた、という話となっている。

〔女眞〕〔秦〕には、

毛女玉姜、字は正美、秦始皇の宮人なり。秦將に亡びんとし、琴を負いて華山に入る（一に云う、驪山に殉葬せられし者、難を避け脱逃す）。道士谷春に遇う。松葉を食らい泉水を飲まして體に緑毛を生じ、身輕きこと飛ぶが如し、遂に飢寒せず。常に夜、北斗を拜す。後人因りて其の地に名づけて北斗坪と爲す。坪北に毛女峯、毛女洞有り、琴を鼓するの聲有り。獵師世世之れを見る。（華陰志）

劉向賛して曰わく、婉嬖毛女、時と遁逸す 真人方を授け 松の秀實を餐す 敗に因りて成を獲 延命深吉 意を巖岫に得 歡を琴瑟に寄す *43。
（投轄録、蔡元長、華山を經、舊と毛女の異を聞き、一見を得んことを思う、向に曉に従者、嶽廟醺爐中、物有り甚だ異なるを見る、以て元長に告ぐ。亟やかに往きて之れを視るに、乃ち一婦、遍身緑毛、色、紺碧の如く、髻漆の如く、目光人を射る。顧元長曰わく *44、「萬も餘り有ると爲さず、一も足らずと爲さず」と。言うこと訖りて去り、其の行くこと飛ぶが如し。命じて其の像を繪かせて之れを祀る *45）。

とみえる。

ここでは、北斗坪の命名の由来を毛女と結びつけている。

『華嶽志』卷一、北斗坪にも、

北斗坪（華嶽圖）、青柯坪の西に峯有り天を挿す、北斗坪と名づく。蓋し毛女、斗を拝し、仙を得るの處。斗を陽龜に拝し、拜斗石、其の側に在り（李之椿記）と *46。

と、ここでは毛女は北斗と結びつけられる。北斗は「人の生死を左右する *47」司命であるため、それを拝して仙を得たということになっている。現地の地形や地名にあわせて毛女の伝説がひろがっていく様子がわかる。

おわりに

「華山洞」は三十六小洞天の一つとされている。ところが「華山洞」と命名された洞そのものは見あたらない。華山には各地に数多の洞窟がある。ところが、毛女洞、水簾洞など、それぞれ別の名がついており、さまざまな由来が記

注 43 毛女玉姜字正美、秦始皇宮人也。秦將亡負琴入華山（一云、殉葬驪山者避難脱逃）。遇道士谷春。教食松葉飲泉水體生綠毛、身輕如飛、遂不飢寒。常夜拜北斗、後人因名、爲北斗坪、坪北有毛女峯、毛女洞、有鼓琴聲。獵師世世見之。（華陰志）劉向賛曰、婉嬖毛女 與時遁逸 真人授方 餐松秀實 因敗獲成 延命深吉 得意巖岫 寄歡琴瑟。

注 44…「顧元長曰」とあり、顧元長の言葉のようにになっているが、文脈からすれば毛女のように思われる。もしそうなら「謂顧元長曰」となるべきところである。

注 45…投轄録、蔡元長、經華山、舊聞毛女之異、思得一見、向曉從者見嶽廟？爐中、有物甚異、以告元長。亟往視之、乃一婦遍身綠毛、色如紺碧、而髻如漆、目光射人。顧元長曰、萬不爲有餘、一不爲不足。言訖而去、其行如飛。命繪其像祀之。

注 46…北斗坪（華嶽圖）、青柯坪西有峯挿天、名北斗坪。蓋毛女拜斗、得仙之處。拜斗陽龜、拜斗石、在其側（李之椿記）。

注 47…『道教辞典』平河出版社、1994、236 頁、稲畑耕一郎氏の司命の解説。

される。「華山洞」は、それらの洞窟群を総称したものといつてよいだろう。華山は大きな山である。そのため、一口に華山といつても、その範囲をすべて考察することは容易ではない。これは、十大洞天の一つであった委羽山が、わずか 60 メートルほどの小さな丘のような山であったこととは対照的である。ただ委羽山の場合は洞窟がかなり奥まで続いているようであり、洞の大きさを基準とすれば、それはかなり大きいのかもしれない。委羽山は周回萬里だが、華山は周回三百里であり、その大きさは、山の高さとは無関係である。

華山には毛女の伝説が、さまざまな形で伝えられている。その原形は『列仙傳』の毛女であろう。毛女は、秦の始皇帝の宮女であったが、秦の滅亡で華山に逃れた。松葉を服用して身体に毛が生えた。そのことによって寒さを防いだばかりでなく、長生も手に入れた。琴を演奏して後々の時代まで、その洞からは琴の音が聞こえた、といった、さまざまな興味深い話が点綴されている。そのため、『太平御覽』のような類書の中でも、毛女は華山・毛・琴・服餌といった、さまざまな項目の中にその名がみえる。

唐になって金仙公主が華山で昇仙した。このこと自体、毛女を意識したものであるかどうかは不明であるが、唐代には毛女峯と毛女の名を冠した峯があり、唐代の道教関係の書物、『仙苑編珠』にも毛女のことを記されており、毛女はよく知られていたと思われる。

今回、調査した大上方は、女道士の曹祥貞氏が修養している場所である。これは毛女、金仙公主とつづく、女仙の系譜の中に位置づけられるものかもしれない。

参考文献

○清、李榕纂輯 清、楊翼武評閱 清、李標図『華嶽志』八卷首一卷図一卷〔出版者不明〕〔出版地不明〕光緒九年（1883 年）補刊序 光緒三〇年（1904 年）補刻封面記、道光辛卯（道光 11 1831 年）刻 光緒甲辰年補刻 板藏仙姑觀（風陵文庫 中國民間信仰 澤田瑞穂 史部 第 11 地理類 名勝之屬 陝西）※ http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko19/bunko19_f0067/index.html 早稲田大学図書館の公開資料。および李榕蔭撰『華嶽志』、文海出版社、1975 年、中國名山勝蹟志叢刊 30 を参照。

○夏振英 黃偉 呼林覺編著『神仙信仰与西岳廟』陝西旅游出版社、1992 年。第一章 西岳廟与華山 一、華山之成名 1、華山的形成、2、西岳积名、3、華山与原始宗教迷信、4、秦始皇对名山大川中劃一、5、漢武帝对五岳制度的定型、6、華山与道教、二、西岳廟与華山的關係、1、西岳廟与華山、2、西岳廟与道教、第二章 西岳廟的興衰、第三章 西岳廟的建築布局、第四章 西岳廟的碑碣、第五章 西岳廟的神話故事、第六章 西岳廟詩選

○攝影 孟宏 撰文 陳宇明『華山・洞天福地』陝西旅游出版社、2003 年。撰文

作者の陳宇明氏は、1969年生まれ、山東済南の人、1991年に出家、全真教華山派第二十五代玄裔。現在、陝西省道教協会理事。この書物は、道士が著したものである。以下、その見出しで関連するものをあげておく。第一章 道教概覧、洞天福地闡義、十洲三島与洞天福地、道教源流、隼山道教概覧。第二章 華山道観及供奉神靈、玉泉院、全真観、純陽観、仙姑観、桃林坪、小上方、大上方、九天宮、北斗坪紫微宮、群仙観、聚仙台、王母宮、都龍廟、玉女祠、鎮岳宮、金天宮、翠雲宮、南天門。第三章 洞室、(一) 神仙洞府、水坏洞、西玄洞、(二) 修真洞室、玉女石室、洞玄石室、蓮花洞、日月岩金天洞、三元洞、長春石室、壺公石室。第四章 法事活動。第五章 文化蘊蔵、華山論劍、博台对奕、服飾、道冠、壁画、彫塑、洞天琴韵、名人題刻、文物古迹。

○蕪泉編著『文化華山』吉林摄影出版社、2005年

○寧文英編著『西嶽緑野踪迹』馬鞍山市礦山研究院印刷廠、2005年

○強躍 張江濤編著『西嶽華山廟』西岳廟文物管理处、三秦出版社、2006年

○荊勤学編著『華山磨崖題刻』中國文化出版社、2009年

○樊光春著『西北道教史』商務印書館、2010年、卷一 西北道教地理、第三章 洞天福地、第二節 華山、卷五 金元西北道教、第四章 西北道教的鼎盛

○『道教事典』平河出版社、1994年、華山、奈良行博稿